



教授就任挨拶

外科治療学講座 腎泌尿器外科分野 野々村 克也



高次診断治療学専攻外科治療学講座の腎泌尿器外科分野小柳知彦名誉教授の後任として、本年7月16日より本分野を担当することとなりました。泌尿器科は皮膚泌尿器科から独立した時の初代故辻一郎名誉教授が30年間を担当し、次の小柳名誉教授も21年間担当していますので、発足から半世紀を経た後ではあります。私が三代目として着任したこととなります。私自身は1949年生まれで、札幌東高等学校を卒業して、1968年北海道大学に入学、1975年に医学部を卒業致しました。その後、苫小牧市立病院1年9ヶ月、旭川医科大学1年、米国NIH 1年以外の27年間即ち人生の半分以上はこのキャンパスで泌尿器科にお世話になり、また先輩後輩と一緒に勉強してまいりました。当初は内分泌学的な分野に興味があり、日常臨床でroutineに測定できなかったtestosteroneやgonadotrophinの測定に腐心し、腎不全をはじめとする消耗性疾患における下垂体-精巣機能についての研究を行いました。それと関連して尿道下裂症例における下垂体-精巣機能の異常の有無について検討する機会を得ると同時に、小柳名誉教授の研究分野の一つである尿道下裂の形成術式の開発に関して

お手伝いをさせていただきました。その後、性分化異常症・先天性尿路異常に対する外陰形成術・尿路再建術の開発へと研究が広がり、現在は小児泌尿器科手術全般に深く関わっております。さらに、当教室のメインテーマである癌術後などの後天性疾患に対する尿路再建、神経因性膀胱・前立腺肥大症などにおける排尿障害に対する排尿管理、腎不全にたいする血液浄化・移植治療などに関しても、各々尿禁制型尿路変更、尿失禁に対する外科的治療、小児腎移植などの面で関わって来ました。今後の研究の方向性として、小児泌尿器科の分野では今迄施行した尿道下裂をはじめとする乳幼児期手術症例が成人に達してどのようなoutcomeを得ているのかを検証し術式の改善を図る、組織の再生・移植を考慮した尿路再建・蓄尿/排尿機能の改善、より安全生着延長の得られる腎移植を目指して、国際的な視点をもって進めて行きたいと思っております。また、これらの研究を通じて小柳名誉教授も強調しておられたhumanity溢れる医師の養成を図るとともに、地域医療を含め日常臨床の充実を図って行きたいと思っております。以上のことから、動乱の大学・医療情勢の現在、スタッフ一丸となって教室運営にあたり、国際的視野に立った研究の推進、humanityを基本とした教育姿勢・日常臨床の実践を目標に掲げる所存です。皆様には、以前と同様、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願ひ申し上げます。

教授就任のご挨拶

脳科学専攻神経病態学講座 神経内科学分野 佐々木 秀直



この度、北大に神経内科を創設された初代教授 田代邦雄先生の後任として教室を担当させていただくことになりました(発令は7月16日付)。大学病院を取りまく医療・研究環境は、最近、とみに厳しさを加えております。そのような環境の中で、教室を引き継ぐことになりました。内外に課題山積の状態ではありますが、どうか宜しくお願い致します。私は昭和

53年に本学を卒業いたしました。同世代の夢はECFMGに合格して米国で臨床研修することでした。さて、私は当時、新設されて間もない筑波大学附属病院内科系レジデントに応募して臨床研修にはいりました。2年間、内科系各科をローテーションした後に神経内科コースに進んで専門医(当時は認定医)の資格を取得いたしました。6年間のレジデントコース終了後は同大の研究生となり、アルツハイマー病の臨床、病理、神経伝達物質の変化などを研究課題と致しました。学位を取得後、昭和60年10月に北海道にもどり、2年間、北祐会神経内科病院(札幌市西区)に勤務した後、昭和62年10月より診療科として独立してまもない神経内科に

サーチマインドを持つ臨床医の育成に不可欠のものと信じて医員として採用となり、以後は北大で診療と研究を続けてまいりました。ご存知のこととは思いますが、神経内科は神経系の器質的・機能的疾患を診療する内科学の1分野です。臨床神経学の基盤は神経症候学にあり、その診断的意義は現在でも揺るぎないものがあります。かつて原因不明とされた遺伝性神経変性疾患の原因究明が近年には大いに進歩して、その多くにおいて疾患分類や診断基準は一新されつつあります。これらの疾患においては発症機序の解明が進んでおり、さらに非遺伝性神経疾患の原因究明も時代の課題となっています。補助診断の面では電気生理はもとより、画像診断や遺伝子診断の進歩に伴い、疾患の診断のみならず病態の掌握にも大きな進歩が見られました。しかし、これらの領域の顕著な進歩に比べて、“治せる”病気の数はそれほどには増えていません。これから神経内科は診断学に加えて治療学を重視して、より成熟した診療科へと脱皮する必要があります。そして、ここに今の神経内科の課題が凝縮されております。世界的な機運ですが、neurologistは治療法開発を最終目標として、病態や発症機序に関する基礎研究への積極的な取り組みに参画することが求められています。さらに、新しい治療法を積極的に臨床の現場に導入していく役割も課せられています。

ところで、北大病院と神経内科を取りまく環境について俯瞰してみると、北海道には幾つかの特徴があります。その第1点は、北大病院は札幌近郊に留まらず北海道全域を対象として診療活動しているということです。神経内科にも道内各地から患者さんが受診されております。この広大な医療圏は独立行政法人化を迎えた大学病院としては大きな利点のはずです。第2点は病気の

頻度や構成には地域差があることです。北海道における神経疾患を見てみると、多発性硬化症などの脱髓性疾患が道外に比べて多い特色があります。また、人口構成の高齢化が関係しているかもしれません、特定疾患医療受給者証の交付数で推定する限り、難治性神経変性疾患の頻度が他の国内地域に比べて高い傾向があります。第3点として、包括医療を中心とした最近の保険医療制度の変革は神経疾患医療において、特有の問題を派生させています。その理由は神経疾患の多くが難治性慢性疾患であり、回復可能な疾病といえども社会復帰には長い時間がかかります。関係者はこの問題への対応に苦慮しています。

最後に大学病院の役割には診療、教育、研究があります。その中で、大学病院でしかできない役割に立ち戻って考えてみると、未来を担う医学生教育と専門医養成が根本にあり、それなくして診療も研究も成り立ちません。来春より開始される卒後臨床研修では結果として“general physician”は学外でも育成可能となります。さらに専門医制度と保険医療が連結する予定と聞いております。このような状況から、専門医養成機関としての大学病院の役割は今後一層高まる予想されます。話題が散漫になりましたが、北大神経内科の基本的役割は、北海道で活躍する神経内科専門医を育てることにあります。神経内科は将来を担う若者が育つ「場」を確保することが長年の目標でした。今後は質の維持と向上が目標です。神経内科を担う若手が多く集まり、研究や診療活動を介して、この分野で最新の情報を内外に発信できるような教室になることを目標として、教員一同力を合わせてじっくりと取り組みたいと考えております。皆様のご支援をどうか宜しくお願ひいたします。

教授就任のご挨拶

侵襲制御医学講座 侵襲制御医学分野 森 本 裕 二



平成15年8月1日付けをもちまして、創物修前教授の後任として、侵襲制御医学講座侵襲制御医学分野を担当させていただくことになりました。私は昭和61年に北海道大学医学部を卒業し、侵襲制御医学講座の前身である麻酔学教室に入局しました。このような若輩の身ながら、伝統ある教室の担当を命ぜられたことは、大変光栄であるとともにその責任の重さを痛感しております。

北大病院の手術件数は毎年増加の一途をたどっており、平成14年度の麻酔科管理における手術件数はすでに全国の国立大学で2位となっています。しかし、もっとも強調すべきことは、単なる件数の増加よりも、これまで大きな事故もなくこれらの麻酔管理を行ってきたことあります。これはひとえに、創物修前教授が専門医を中心とした周術期管理体制を構築されたこと、そして、世界的にも先駆的な周術期コンピューター患者管理システムをいち

早く開発、導入されたことなどが大きく貢献しています。これからもこれらを一層発展させ、患者さんの安全を最優先として、日々の臨床に取り組んでいきたいと考えております。これから課題として目指すところは、手術侵襲からいかに臓器や生体を守るか、その手術侵襲自体を如何に制御するか、このような質の高い周術期管理の完成であります。さらにこれを、疼痛という侵襲を制御する場であるペインクリニック、臓器不全や外傷という侵襲を制御する場である集中治療や救急医療に応用し、いわゆる侵襲制御医学のコンセプトを臨床のみならず研究面でもよりいっそう推し進めていくつもりです。

私のこれまでの主要な研究テーマは、脳蘇生と脳保護といった、主として脳を対象としてきましたが、今後は従来からの当科での主要な研究テーマである侵襲時の呼吸・循環変化の解析、さらには、全身麻酔薬の機序を介した意識についての研究、疼痛及び呼吸周期の機序といった、いわゆる生命の根源にせまるような基礎的な研究も展開していくかなければなりません。

独立行政法人化を目前として、中央診療部門である手術室、集中治療部、救急部が密接に連携していることが、北大病院のよう

な急性期病院において今後益々重要になると考えます。幸い救急医学分野の丸藤教授は、同じ同門出身であり、また私自身研修医の時からご指導を受けていた縁もあり、これからも救急医学分野と緊密な協力関係を保ちながら、これら部門の発展に貢献していけると考えております。また、学生教育、卒後臨床研修の充実という点でも、救急と麻酔が協力関係にあることが重要であります。

最後になりますが、現在麻酔科医不足は全国的な問題となって

おります。当教室のman powerも決して十分とは言えません。より良い医療を提供するため、侵襲制御医学のコンセプトに合致した優秀な麻酔科医を数多く育成することもこれからの重要な使命と考えます。以上、未だ学半ばの身ではありますが、微力ながら、北大、さらには医学の発展のために全力をつくしていきたいと考えております。これからもご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

第42回医学展を振り返って

第42回医学展実行委員長 医学部5年 那須裕也

毎年恒例の医学展も今回で第42回を数えることができました。市民と学生との交流を目的とし、今回のテーマは、話して和んで輪になるという意味の「話・和・輪の医学（わわわのいがく）」としました。そして、今年はもう一つ、「創造する」ということを目標に、自分たちの手で考え・行動し、医学展を創り上げていきました。



では、第42回医学展を簡単にご紹介いたします。

今回は装飾から気合いをいれてみました。北海道大学のメインストリートに来た市民の方に医学展をアピールする為、風船や看板を用い、多くの方を医学部内へと誘導することができました。さらに天候にも恵まれた為、2日間で延べ5000人弱の方にご来場いただきました。

まず屋外企画からご紹介しましょう。

「妊娠・老人・車椅子体験」では、実際の妊娠8ヶ月の妊婦さんと同じ重さの物をつけ、赤ちゃんの模型を抱いてなど、普段はなかなかすることのできない数々の体験をしていただきました。

今回も「盲導犬」に来ていただきました。老若男女を問わず多くの方に集まりいただき、盲導犬が動搖するのではないかと心配しましたが、そこは盲導犬！ 何事もないかのように堂々とした態度で、目隠しした市民の皆さんを誘導していました。かわいかったです。

その他、外では展示企画として、各講座紹介の「イケメンコンテスト」、「救急救命症例クイズ」が行われました。いざという

ときに役に立つ救急救命の方法を、市民の皆さんに興味深げに学んでいたようです。

次に屋内企画のほうでは、医学部からは、時間生理学分野の本間研一教授に、「宇宙の睡眠と生体リズム」と題して、宇宙空間における睡眠についてお話をいただきました。講演終了後、多くの質問が飛び交い、市民のみなさんの関心の高さがうかがえました。

精神障害者のコミュニティー施設「べてるの家」の皆さんに来ていただきました。「弱さを大切に！」「安心してサボれる会社づくり」「リハビリテーションより商売」などいわゆる一般的な精神障害者や福祉のイメージをふっ飛ばすような発想のモットーや活動で広く知られています。そんな彼らに、「自分との向き合い方」、「あるがままに生きる」ということについて語っていただきました。

そして、道内出身の元プロ野球選手の盛田幸妃さんに講演していただきました。脳腫瘍から復活しカムバック賞を受賞した彼の人生について、裏話も含め熱く語っていただきました。講演会後にはサイン会も行われ、当時をよく知る同世代の熱い野球ファンから、これからプロ野球を担うであろう小さい子まで多くの方に参加頂きました。

「模擬医療裁判」では、実際に起こりうるような医療裁判の様子を演劇にて行い、後半は医療裁判を起こさないようにするにはどうしたらよいか？、など現在の医療について観客参加型の講演



を行いました。

「救急救命体験会」では、救急救命の専門家たちをお招きして心肺蘇生の方法を実演・指導しました。参加された方はみな一生懸命でした。

医学展の中で一番伝統があるといつても過言ではない「市民と医学生による検査体験会(通称：市民検)」も行われました。今回は新企画として、医学生だけでなく市民の皆さんにも、医者側の気持ちを味わってもらおうということで、エコーや聴診器を実際



に手にとって検査をしていただきました。例年以上に多くの方でにぎわった為、用意していたパンフレットが1日でほぼなくなるというハプニングもありましたが、皆さん、十分に医学生との交流を楽しんでいただけたのではないかでしょうか。

数々の失敗もありますが、多くの方にご来場いただき、普段はできない貴重な体験をすることができました。学友会・同窓会、各講座をはじめ多くの方のご協力を頂き無事終了することができました。この場を借りてお礼申し上げます。



罪人と共に 一第7回医学部学生教育ワークショップ報告一

総合診療部 前沢政次

どうなることやら。

「今年はどこもいっぱい。先生どうする？」と医学部事務部専門員の太刀川さんの声。最近会場として使っている夕張は「ひまわり」も「ふれあい」もすでに予約で満室の盛況とのこと。今年のFD(Faculty Development)は会場探しから始まった。

ほどなく太刀川さんの強力なりサーチで月形町「はな工房」が候補に上がった。研修宿泊施設というが、名称は何やら女性向けの施設のようである。下見に行くべということで、二人で出かけた。会場のすぐ隣には温泉がある。目の前は皆楽公園がある。そばにはラーメン屋と焼き鳥屋。これで決まり。

さて、今年のテーマは「名義貸し問題」とはいかない。ぜひとも取り組まなければならないテーマがあった。PBLチュートリアル。

一昨年は「医学教育の原点を考える」昨年は「コアカリキュラムを踏まえた新コースの設計」ときたので、今年は「問題解決型学習を推進する」とした。

かくして第7回北海道大学医学部学生教育ワークショップは平成15年8月23日（土）24日（日）樺戸郡月形町で開催の運びとなった。参加者は教員が教務主任櫻井教授以下30名。事務官が2名であった。昨年4名に増加した女性は今年ゼロ。何と往路はバスガイドもなし。

バスの中から自己紹介、グループ名の決定と次第に乗ってくる。グループはアルカイダ、bingo、チャンピオン、ドーピングと決定。一時間少々で会場に到着。雨も上がって写真撮影。すぐ

研修に入る。まずは医学教育改革の歴史から。国民の期待感、臨床医のあり方、診療参加型実習、共用試験、CBT(Computer-based Testing)とOSCE(Objective Structured Clinical Examination)、そしてPBL(Problem-based Learning)となぜ歴史は動いてきたか。ざるそばをすすって、13時からはワークショップ(WS)Iで4つのコースの一般目標、個別行動目標づくり、15時からWSIIで方略づくり、特にPBLチュートリアルの具体的活用法を議論した。さすがに医学部教員である参加者は時間内に見事に仕上げる。かくして①プレメディカル演習の分子生物学、②老年保健学、③統合生殖、④統合循環器のカリキュラムができるがった。激しく質疑が飛び交い、休憩時間は短くなつたが、露天風呂にチャレンジ。



7回目のFDにして、はじめて夕食に生ジョッキがつき、19時からほろ酔いディベート。寺沢さんの酩酊司会で、いえ、あの名司会で「医学部入学者を『全員卒業』させるか否かを賛否2チームに分かれて議論。厳しい判定会議の後、反対チームが勝利、だつたかな？？　さらに場を変えて宴会は深夜まで続いた。

翌朝は8時半からWSⅢ「問題解決型学習のシナリオづくり」これが一番盛り上がった。特に統合生殖に登場した女性は「毎晩励んでいるのに」「実はわたし過去に」と人生の機微を語り、学生の興味をググッと引き寄せる。報告者も皆演技派だった。そして櫻井さんの教員の教育評価業績に関する話題提供でしめて、無事終了。

カツカレーを喰らい、月形樺戸博物館見学へ。明治14年北海道ではじめて集治監。その歴史は囚人たちが道路を作り、多くの開拓民が恩恵を被った。大正8年廃監となつたが、この町に住む人

は近年、少年院や刑務所を誘致したと聞く。まさに「罪人と共に」だ。

参加者・協力者の皆様、お疲れさま。



平成15年度 東日本医科学総合体育大会

医学部3年 波多野 恵 彦

今年も7月下旬から8月中旬にかけて、第46回東日本医科学総合体育大会夏季大会が開催されました。東医体は参加校36校、参加者数約一万三千人ほどの、私達医学部の学生にとって最も大きな大会です。一年を通して、この大会でよい成績を収めることを最終目標に掲げている部活も多いと思います。

今年度北海道大学からは、東医体夏季大会に準硬式野球、テニス(男女)ソフトテニス(男女)卓球、バレーボール(男女)バトミントン(男女)、サッカー、バスケットボール、柔道、剣道、水泳(男女)ボート、ハンドボール、ゴルフの14競技、19部門に参加いたしました。メダルを獲得した団体は以下のとおりです。

準硬式野球 優勝

バスケットボール 優勝

バトミントン 3位

剣道(女子) 3位

この他にも個人競技で水泳、ソフトテニス、柔道では入賞者がでております。

本年度の主管校は山梨大学医学部、東邦大学医学部、東京医科大学、慶應義塾大学医学部で、ほとんどの競技の試合が関東で行

われました。また、冬には東医体冬季大会が開催され、アイスホッケー、スキーの試合が行われることになっています。日頃の練習の成果を発揮し、満足のいく結果を残せるよう頑張ってほしいと思います。なお来年度、第47回東医体は北海道大学、旭川医科大学、札幌医科大学、弘前大学医学部の4校が主管を受け持つことになります。総主管校である旭川医科大学を中心に、各大学に運営部を設置し、今年度の主管校からのアドバイスを受けながら着々と準備をすすめております。私自身、昨年までは“参加者”としてしか東医体を知りませんでしたが、今年に入り、昨年度評議委員の中田さんからこの仕事を引き継ぎ、さらに9年に一度の機会に恵まれ、運営部の一員としても東医体の“運営”に携わらせていただきました。来年度大会に向か、一生懸命準備を進めていくつもりではございますが、至らない点も多いかと思います。この大会が選手だけではなく、OBやOGの方々や諸先生方、教務掛のみなさんといった多くの関係者各位の多くなるご支援ご協力があってこそ成り立っているということに改めて気付かされました。この場を借りて厚く御礼申し上げるとともに、今後ともご支援お願い致したいと思います。



平成15年度医局対抗野球大会

北海道大学医学部附属病院第2外科 鈴木 善法

例年恒例となりました医局対抗野球は今年もたくさんの医局が参加し、5月下旬より試合が開始されました。今年は決勝戦が“つどーむ”で行われることがあらかじめ決っており、それにむけ各医局とも日程を調整し試合を行いましたが、学会や医局の都合等により例年通り日程は遅れました。しかし、多少の遅れはあったものの天気にも恵まれ、7月中にすべての試合を終えることができたことは、なによりありました。予定されていた“つどーむ”での決勝戦は延期となっていましたが、よいグランドを予約してあったことから眼科対第2外科の準決勝を行いました。決勝は第1内科を準決勝で破った整形外科と第2外科の戦いとなりました。白熱した展開となりましたが若さに勝る第2外科が快勝し、優勝させていただきました。この優勝で第2外科は大会3連覇を達成しました。また、今年は35年間この医局対抗野球に参加し続けた当科の加藤紘之教授が教授御在任最後の年でもあり、担当の私は初戦開始以前より「必ず優勝するように」といわれておりました。なんとか優勝することできまして第2外科野球部主将として

ほっと胸をなでおろしております。今年の幹事医局でありました婦人科の武田先生には日程の調整やグランドの手配等に御足労いただきましてありがとうございました。来年もまた多くの医局に参加していただき、さらに医局対抗野球が盛り上がる 것을期待します。



お知らせ

◆ 北大オープンユニバーシティ・体験入学について ◆

去る8月4日（月）北大企画によるオープンユニバーシティが開催されました。

医学部では、午前及び午後の2回開催し、学部長挨拶の後、学部案内のビデオを上映し、各分野のご協力を得て、参加者を学部内17箇所に分け研究室等の見学を実施しました。

見学終了後の参加者からの質問の中には、最近の医師を主人公としたコミック漫画に対する感想を求められたり、医局制度等に関する質問もあり、ご出席いただいた教官が回答に窮する場面や苦笑する場面もありましたが、無事終了いたしました。

今年度の参加者は午前の部107人、午後の部88人の計195人が参加しました。

また、8月5日（火）10時から体験入学が開催され、75人が参加されました。

講義題目「癌と学ぶ」として腫瘍外科学分野 加藤紘之教授による模擬講義が行なわれました。

ビデオ、スライドを駆使され、限られた時間の中で高校生にもわかりやすい内容で講義が進められ、事前に寄せられた質問にも具体的な事例を交えながら優しい口調でお答えいただきましたなど、終始和やかな中で終了いたしました。

◆ 医学部卒業試験日程 ◆

今年度の卒業試験は、臨床実習が終了し臨床演習（夏季自主演習）を終えた9月11日（木）から始まりました。試験期間は11月19日（水）までとし、11月25日（火）には、客

観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination : OSCE）を実施する予定です。（教務掛）

◆ 医学部学士編入学について ◆

平成16年度医学部学士編入学試験（募集定員5人）の合格発表が9月5日（金）にありました。
志願者数312人（昨年度は350人）、志願者倍率6.2.

4倍、第1次選抜受験者284人、同合格者31人、第2次選抜受験者31人、最終合格者5人であり、辞退者無く全員入学手続きを完了いたしました。（教務掛）

◆ 医師国家試験の案内について ◆

第98回医師国家試験の施行が官報に掲載され、試験日程が次ぎのとおり公表されました。

出願期間：平成16年1月15日（木）から同年1月30日（金） 試験期日：平成16年3月20日（土）、21日（日）及び22日（月） 合格発表：平成16年4月22日（木）午後2時に厚生労働省、地方厚生局及び地方厚生支局にその氏名を掲示して発表する。

なお、詳細は

<http://www.mhlw.go.jp/general/sikaku/1.html>

の厚生労働省ホームページで見ることが出来ます。

また、医師国家試験改善検討委員会報告書（平成15年4月17日付け）を受け、第99回医師国家試験（平成17年実施）から医師国家試験が早期化され、これまでより約一ヶ月試験期日が早まり、2月第3週に試験実施、3月下旬（3月29日から31日）に合格発表の日程で実施される予定です。（教務掛）

◆ 平成16年度大学院医学研究科（博士課程）入学試験について ◆

平成16年度大学院医学研究科（博士課程）の入学試験日程は、前期試験および後期試験の2回に分けて実施されております。前期試験は、平成15年8月4日（月）から8月8日（金）までの出願期間で、9月10日（水）に実施され、合格発表は、9月19日（金）に行われました。

また、後期試験は以下のとおりです。

出願期間：平成15年12月15日（月）から12月19日（金） 試験日：平成16年2月4日（水） なお、外国人留学生の場合は、翌日5日（木）に日本語試験が実施されます。

合格発表：平成16年2月27日（金）の予定

◆ 平成16年度大学院医学研究科医科学専攻（修士課程）入学試験について ◆

平成16年度大学院医学研究科医科学専攻（修士課程）の入学試験は、平成15年7月28日（月）から8月

1日（金）までが出願期間で、入学試験は9月8日（月）に実施され、合格発表は9月19日（金）に行われました

◆ 平成15年度科学研究費補助金採択状況 ◆

金額単位：千円

研究種目	年度別		12		13		14		15		備考
	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額	
地域連携推進研究費	1	23,800	1	21,000	1	21,000	—	—	—	—	12年度新設、14年度以降募集中止
特定領域研究（A）	1	3,500	3	7,600	—	—	—	—	—	—	13年度で廃止
特定領域研究（B）	2	20,000	2	20,000	—	—	—	—	—	—	〃
特定領域研究（C）	4	16,200	7	31,000	—	—	—	—	—	—	〃
特定領域研究	—	—	—	—	10	48,200	9	50,300	従来の「特定領域研究(A・B・C)」を統合		
基盤研究（S）	—	—	1	37,600	1	11,500	2	49,400	13年度新設		
基盤研究（A）	7	44,500	5	65,676	4	64,200	4	37,400			
基盤研究（B）	33	170,272	34	174,700	39	190,770	35	133,100			
基盤研究（C）	25	42,547	24	36,100	22	34,599	21	38,000			
萌芽的研究	17	18,200	19	18,600	—	—	—	—	—	—	13年度で廃止
萌芽研究	—	—	—	—	16	28,511	18	30,200	14年度新設		
奨励研究（A）	12	14,000	8	7,200	—	—	—	—	—	—	13年度で廃止
若手研究（B）	—	—	—	—	7	12,400	8	13,700	14年度新設		
計	102	353,019	104	419,476	100	411,180	97	352,100			

採択率（新規・継続を含む）	12年度 32.5%	13年度 33.8%	14年度 37.7%	15年度 40.6%
---------------	------------	------------	------------	------------

編集後記

編集後記を書くようにとのご指示を受け、あらためてすべての原稿に目を通じてみた。3新任教授のご挨拶が載っている。この種の原稿の執筆は大変緊張するもので、お忙しい中を期限に間に合うよう書いていただいた3人の先生には心から御礼を申し上げたい。しかし比較的近くにいるはずの我々でさえ、その先生をよく知っているようで実はまったく知らないものである。この3編の記事は3先生のお考えや人となりを知る意味で興味深く貴重なものである。前沢先生には「罪人とともに」というAnecdotalなタイトルと、いつもの名文で第7回学生教育WSの報告記を寄せていただいた。楽しさの中の重要性をぜひ御一読いただきたい。ほかにも医学展、東医体、医局野球などについて、楽しい記事をいただいた。すべての皆様に感謝申し上げたい。
 (安田 和則)

— Home Page のご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/medonly/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
 060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
 連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003
 編集委員 澤口 俊之、安田 和則、菊田 英明
 小橋 元、佐藤 松治